

現代日本語における副詞「せっかく」の意味・機能をめぐって

許 燕 (きょ えん)

キーワード：陳述性、評価性、意志性、叙法性、多義性

要 旨

本稿は、現代日本語における副詞「せっかく」の意味と機能を、その実証研究を通して追究した。具体的には、「せっかく」を〈副詞用法〉〈連体用法〉〈擬似述語用法〉の三つの用法に分類したうえで、主に現代日本語における〈副詞用法〉に着目して記述を行った。さらに、副詞用法を〈連用修飾関係〉と〈連体修飾関係〉に二分し、〈連用修飾関係〉の下位区分に〈逆接条件関係〉、〈準逆接条件関係〉、〈順接条件関係〉、〈準順接条件関係〉、〈逆接・順接両義の条件関係〉の五分類を、〈連体修飾関係〉の下位区分に〈準逆接条件関係〉、〈準順接条件関係〉、〈逆接・順接両義の条件関係〉の三分類を設けた。本稿は、上記の用法分類をもとに「せっかく」のモダリティの面における〈評価性〉と〈意志性〉、意味の面における〈多義性〉との相関関係を構文上の考察を通して記述した。とりわけ、「せっかく」の共起形式が逆接条件関係において「のに」、順接条件関係において「のだから」に集中していることへの原因究明を、従属節の述語に後続する接続形式との共起、および主文の文末形式による考察の中で記述した。本稿は、副詞「せっかく」は、歴史的変遷によって意味が多義語化してきており、その評価性と意志性は連続していると見なす。

1 はじめに

今日〈副詞〉と呼ばれるものは、山田(1908)の〈語の副詞〉に由来しており、〈情態副詞〉、〈程度副詞〉、〈陳述副詞〉の三体系を成している。本稿は、山田の分類に従い、「せっかく」の本質究明を試みる。工藤(2000)は陳述副詞について、「陳述副詞(叙述副詞・呼応副詞とも呼ばれる)は、否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を、補足したり明確化したりする副詞であり」、「一定の陳述の意味を担う形式と呼応して用いられる」と規定している。通説的に、典型的な陳述副詞は、主に述語の陳述的な側面に関わって、属性的な意味の側面には関係しないとされている。

しかし、〈陳述副詞〉の中には、「せっかく」のようにその位置づけが研究者によって異なる一群がある。これらの副詞は、日本語学習者にとって習得が非常に困難である。本稿の執筆動機でもあるが、筆者自身、辞書を調べてその意味を理解したつもりでも使いこなすまではかなり長い道のりを辿った経験がある。同じ陳述副詞であっても、明確な呼応形

式を持ち、位置づけが確定している「たぶん」「けっして」のような言葉はさほど難しく感じないのに対し、なぜ「せっかく」は習得にここまで時間を要するのだろうか。思うに、「せっかく」をはじめ、「さすが」や「せめて」のような副詞は、典型的な陳述副詞とは言いがたく、その位置づけも未だ議論の余地を残していることに一因があるのではないだろうか。渡辺(2001)は、「せっかく Pなのに Qでない」と、「われわれが何気なく『せっかく』と言い出した時、『P』への評価、『Q』への期待、その期待どおりに行かないことへの惜しみ、これらのすべてが心の中に用意されている」(p.35)と述べている。

本稿は、日本語学習者の一助となるべく、陳述副詞の中でも周縁的なものの一つとされる「せっかく」の意味と機能を、その共起形式の考察とともに分析し、その位置づけを明らかにすることを目的とする。

1.1 先行研究と本稿の立場

ここでは、まず、国語辞書における「せっかく」の記述に触れておく。本稿は、日本語学習者にとって最も利用頻度の高い以下の辞書を対象に調査を行った。結果、インターネットで検索する際にトップにヒットする『デジタル大辞泉』、『大辞林』、『精選版日本国語大辞典』をはじめ、多くの電子辞書に収録されている『広辞苑』『明鏡国語辞典』のいずれも、「苦労して」、「残念だ」、「申し訳ない」、「惜しい」などの意味に重きを置いていることが判明した。一方、上記5冊のうち3冊¹は、「せっかく～のに」のような逆接関係の用法のみを取りあげ、「せっかく～のだから」のような順接関係の記述は見当たらなかった。さらに、「せっかく」と「せっかくの」、「せっかくだが」などの形式を区別せずに記述しているため、非常に分かりにくく日本語学習者の理解をいっそう困難なものにしている。

では、なぜ上記のような国語辞書の代表格とも言うべき『大辞林』や『精選版日本国語大辞典』、『広辞苑』に順接関係の用法記述が載っていないのか。これは、「せっかく」における基本義が逆接ということなのだろうか。渡辺(1980)は、「せっかく」の用法を下記の7つの用法にモデル化している。そのうち、単文用法①の「せっかく勉強するように」のような用法は現代語にも残っていると述べているが、古体と名付け、研究対象から外している。また、単文用法①から、順接関係の連用修飾用法②が派生し、それから逆接関係の連用修飾用法③が派生して生まれた(①古体→②順接→③逆接)という、派生プロセスを述べている。しかし、林(2016)は、渡辺の派生順は「あくまで表現心理上の派生関係」であるとし、「通時的観点から用例を分析すると」「歴史的な順序(①→②→③)とは別の物である」(p.65)と指摘している。この記述は、上記の3つの辞書記述に逆接関係の用法のみが記載されていることへの妥当な解釈の一つになり得ると思われる。

① せっかく A: 価値アル事態 → 勧誘

○せっかく勉強するように。

② せっかく A: (上ニ同ジ) + B: Aニ随伴シテ期待(未実現)サレル事態 → 意志・希望・命令・勧誘

○せっかくここまで来たのだから、二三日泊まってお行き。

② せっかく [A:(上二同ジ)] + [B:(上二同ジ)] × 否定 (未確定デモ確定デモ) → 惜しみ・恨みナド

○せっかくここまできたのに、もう帰るのか。

③ せっかくの [a: 価値アル事態ノ A 一項] + [B:(上二同ジ)] → 意志・希望・命令・勧誘

○せっかくのチャンスを 利用しようよ。

④ せっかくの [a:(上二同ジ)] + [B:(上二同ジ)] × 否定 (②ノ場合ニ同ジ) → 惜しみ・恨み

○せっかくの花が 散ってしまった。

⑤ せっかくだ (A ソノモノヲ含ム) + [B:(上二同ジ)] → 意志・勧誘

○せっかくだから 引き受けよう。

⑥ せっかくだ (⑤ノ場合ニ同ジ) + [B:(上二同ジ)] × 否定 (未確定)

○せっかくだが 辞退しよう。

⑦ せっかくだ (A + B × 確定的否定 ソノスベテヲ含ム) → 同情

○せっかくだったね。

(渡辺：1980 原文引用は『国語意味論』(2002) pp.328-329 下線は筆者によるもの)
さらに、渡辺(1980、2001)は、「せっかく」を「見越しの評価」を表す副詞として位置づけ、「話手にとって価値あるPが実現し、それに伴って実現してPの価値を完全なものにすることを期待されるQを、Pの延長線上に見越す言葉」(渡辺2001:p.35)としている。

これに対し、工藤(1982)は、陳述副詞を〈叙法副詞〉〈とりたて副詞〉〈評価副詞〉に分類し、「せっかく」を「C条件-接続の叙法」の下位区分である「21 譲歩~理由」(pp.54-55)に位置付けている。さらに、工藤(1997)では「せっかく」の意味と機能の両面を融合させて記述しており、「評価性をあわせもった条件的叙法副詞」であるという見方を示している。工藤による評価成分とは、「文の叙述内容に対する話し手の評価を表す、先行する独立成分」である。

加えて、渡辺(1980)をはじめとする先行研究を概観するに、「せっかくの」に代表される連体用法を副詞用法の圧縮表現である、という立場が主流である。しかし、副詞用法を連体用法に置き換えが可能だからと言って、両者が表している意味も同じであるとは限らない。

次の用例を見てみよう。

- a. せっかく母がご馳走を作ってくれたのに、だめにした。
- b. せっかく母が作ってくれたご馳走をだめにした。
- c. せっかくのご馳走をだめにした。

(上記は筆者による作例である。)

これらの文は、一見渡辺(1980)で言及したとおり、「a → b → c」の順に圧縮・吸収さ

れていくように見えなくもないだろう。しかし、置き換えが可能であっても表現する構文的意味は異なっていると考えられる。例えば、「c. せっかくの ご馳走 をだめにした。」は、「b. せっかく 母が作ってくれた ご馳走 をだめにした。」のほかにも、次のようないくつものパターンに展開可能である。

- ① せっかく 三ツ星ホテルで買って来た ご馳走 をだめにした。
- ② せっかく 昼ご飯を我慢してまでありつけた ご馳走 をだめにした。
- ③ せっかく 楽しみにしていた ご馳走 をだめにした。
- ④ せっかく 用意してくれた 就職祝いの ご馳走 をだめにした。

(上記は筆者による作例である。)

つまり、「せっかくのご馳走」は、上記の①～④のように発展できるのだ。果たして、このような様々な文の意味を「cはbの圧縮形である」という一言で片づけられるのだろうか。

1.2 「せっかく」の全体像と研究対象

本稿は、「せっかく」を〈副詞用法〉〈連体用法〉〈擬似述語用法〉の三つに分類した。ここでは、「せっかく～のに／のだから」に代表される連用修飾関係、「せっかく～N(名詞およびそれに準ずる形式)」に代表される連体修飾関係を〈副詞用法〉とする。また、「せっかくのN(名詞およびそれに準ずる形式)」を〈連体用法〉、「せっかくだが／だから～」に代表される用法を主語が取れない述語であるという認識から〈擬似述語用法〉に分類する。

下記の表1は、全用例の資料別・用法別の分布である。本稿では、「せっかく」「折角」「セツカク」の文字列で、資料別³に用例を採集し、1081例を集めることができた。以下、記述の便宜上、用例を除いた「せっかく」「折角」「セツカク」の表記を「せっかく」に統一して述べることにする。

表1: 「せっかく」の全体像

資料 用法	新潮 100冊 (1894年 ～1987年)	新潮 絶版100冊 (1915年 ～1985年)	CASTEL/J (1967年 ～1992年)	BCCWJ (新聞) (2001年 ～2005年)	BCCWJ (雑誌) (2001年 ～2005年)	合計
副詞用法	227	383	35	11	71	727
連体用法	103	115	5	2	39	264
擬似述語用法	19	50	2	—	12	83
古体 ⁴	3	4	—	—	—	7
合計	352	552	42	13	122	1081

本稿は、「せっかく」の三つの用法の中から用例数のもっとも多い〈副詞用法〉に着目して記述を行う。次の表2は、〈副詞用法〉727例の資料別・時代別分布である。

表2：近現代における「せっかく」の副詞用法の分布

資料 用法	新潮 100冊 (1894年 ～1987年)	新潮 絶版100冊 (1915年 ～1985年)	CASTEL/J (1967年 ～1992年)	BCCWJ (新聞) (2001年 ～2005年)	BCCWJ (雑誌) (2001年 ～2005年)	合計
明治	10	5	—	—	—	15
大正	28	38	—	—	—	66
昭和戦前	23	138	—	—	—	161
昭和戦後	166	202	35	11	71	485
合計	228	384	35	11	71	727

なお、表3は、昭和戦後の1945年から2005年までの現代語における用例を接続関係、修飾関係ごとに分類したものである。本稿は、渡辺（1980）に従い、古体を除いた昭和戦後の485例を研究対象とし考察する。

まず、「せっかく」の副詞用法を大きく主文の述語にかかる用法と、従属節の述語にかかる用法に二分し、その文末形式を検討する。次に、従属節の述語にかかる用例を〈連用修飾関係〉と〈連体修飾関係〉に分類し、その下位区分に〈逆接条件関係〉、〈準逆接条件関係〉、〈順接条件関係〉、〈準順接条件関係〉、〈逆接・順接両義の条件関係〉を設ける。

表3：現代語における「せっかく」の副詞用法の分布

用法	接続関係						小計	合計	
	修飾関係	逆接	準逆接	順接	準順接	逆・順両義			
副詞用法	主文	—	6	—	23	1	30	485	
	従属節	連用修飾関係	173	9	89	5	3 ⁵		279
		連体修飾関係	—	148	—	15	13 ⁶		176
割合		35.7%	33.6%	18.3%	8.9%	3.5%	100%		
逆接・順接別割合		69.3%		27.2%		3.5%	100%		

ここでは、「せっかく～のに／ても／ながら」のような明らかな逆接関係の共起形式を持つ連用修飾関係の用例を〈逆接条件関係〉に、「せっかく～て／と／を／が」のような逆接・順接の意味を持たない助詞と共起するものの、文脈から逆接関係が読み取れる連用もしくは連体修飾関係の用例を〈準逆接条件関係〉に分類する。同様に、「せっかく～のだから／ものだから」のような明白な順接関係の共起形式を持つ連用修飾関係の用例を〈順接条件関係〉、「せっかく～て／と／を／が」の形を取り、文脈でのみ順接関係が読み取れる連用もしくは連体修飾関係の用例を〈準順接条件関係〉と名付ける。さらに、「せっかく、こんないいキャンプしてもらっていて、しっかりしないなら、申し訳ないよ」（一

瞬の夏 - 沢木耕太郎) のように、文脈から逆接と順接の両方の解釈が可能な用例を〈逆接・順接両義の条件関係〉とする。

2 連用修飾関係

表4：連用修飾関係における「せっかく」の共起形式の分布

接続	共起形式	用例数	接続	共起形式	用例数	接続	用例数
逆接	のに	111	順接	のだから	69	逆接 順接 両義	—
	ても	33		ものだから	2		
	ながら	11		からには	2		
	ものを	6		からと ⁷	2		
	が	6		ので	3		
	けれども	4		なら	8		
	ものの	1		し	3		
	くせに	1		—	—		
	小計1	173		小計1	89		
準逆接	て	7	準順接	て	3		3
	と	1		と思うと	1	—	
	だけに	1		連用中止	1	—	
	小計2	9		小計2	5	—	
合計	182	合計	94	合計	3		

本節では、連用修飾関係における用例考察を通して「せっかく」の本質究明に努める。表4から分かるように、逆接条件関係の用例のうち「のに」と共起する用例は111例あり、これは逆接および準逆接の全用例182例の61.0%を占めている。また、順接条件関係の用例のうち、「のだから」や「ものだから」と共起する用例は71例あり、順接・準順接94例中の75.5%に上っている。このように、小矢野(1996、1997a、1997b)や蓮沼(1987、2012)で既に指摘されている「せっかく」と共起する用例が逆接においては「のに」、順接においては「のだから」に集中していることが本稿の考察からも実証された。

では、なぜ「せっかく」の共起形式が逆接条件関係においては「のに」、順接条件関係において「のだから」と共起しやすいのか。その原因究明は未だ明らかにされていない事象が多く、本稿はこれに焦点を当て連用修飾関係の記述を進めることにする。

2.1 逆接条件関係

「せっかく」と共起形式をもつ逆接条件関係には、「のに」や「ても」、「ながら」など多様な形式がある。上記の表⁴はその接続形式と各々の用例数をリスト化したものである。

2.1.1 「のに」と共起する逆接条件関係

「せっかく」の逆接条件関係の用例173例のうち、「のに」と共起する用例は111例あり、これは逆接条件関係全体の64.2%を占めている。「せっかく」は、その共起形式においてなぜこのような偏りをみせているのか。

森田(2007)によると、「のに」は「前件で述べた内容に反する状況の現状に対し、意外・不服・不満の気持で事態をとらえる逆接の確定条件」を表している。「のに」が「逆接の確定条件」を表しているという説明は、「せっかく」の実例考察からも明らかになっている。下記の用例のように、「のに」と共起する「せっかく」の用例のほとんどが従属節の述語の過去形に後続している。

なお、本稿は「せっかく」に__、逆接条件関係の共起形式に__、順接条件関係の共起形式に__を引いて区別する。

- (1) 「見るだけでなく男も琉球舞踊を踊りたい」という要望にこたえ、昨年七月から十月にかけて本部町教育委員会が開いた「男のためのかぎやで風講座」がサークルの前身。講座は十月の発表会を最後に終わったが、受講生から「せっかく学んだのに、終わったら、もったいない」「もっと上手になりたい」という声が多く、十一月に男性受講生十三人でサークルを立ち上げた。(琉球新報 2002/2/24)

ただし、「のに」が後続する従属節の述語には、ル形やテイル形をとる用例も少数ではあるが存在する。しかし、これは「のに」が「逆接の確定条件」を表しているということの反例ではないことが、その文脈からも汲みとることができる。例えば、(2)「子どもが生まれる」は決まった予定であると考えられる。このように、「のに」は「せっかく」と共起する際にも、逆接の確定条件を表していることは明らかである。

- (2) 「あらしでもないのに、ドカーンとやられて未亡人なんて、ごめんだ。そいって、いまのうちに船乗りやめてもらおうかしら。ふたりで百姓でもなんでもしてみせる。せっかく子どもが生まれるのに、わたしはわたしの子にわたしの二の舞ふませたくないもん。やめてもいいわね。」(二十四の瞳-壺井栄)

では、「せっかく」と共起する「のに」の文(以下セツカク文1とする)と、「せっかく」との共起形式を持たない「のに」の文(以下ノニ文とする)との相違点はどこにあるのか。

まずノニ文の場合、否定形「ない(に準ずるもの)」を先行させる用例は珍しくない。これに対し、セツカク文1の場合、否定形を先行させる用例は111例中一つもなかった。データからも分かるように、話し手が好ましくないと受け止めている事態の場合、「せっかく」を先行させるのは非常に困難であり、おさまりが悪いのではなからうか。

また、ノニ文の場合、動詞、形容詞、名詞、形式名詞、副詞、助詞など様々な品詞を制限なく先行させることが明らかになった。しかし、セツカク文1は全111例中7例を除き全部動詞(動詞句を含む)と接続している。下記は形容詞、名詞、形式名詞の用例である。

- (3) 「ヤツラすぐ疲れるさ。それとも、おれが叱りつけてやろうか」「いや、そうじゃな

い。歌謡曲がうるさいんだ。何だか途轍もないヴォリュームで鼓膜が痛い。せっかく氷と刃の触れ合う音を聞きたいのに…。フィギュアの練習はあの音を聞かなくちゃ充分にできないのに…」和香子は両手で耳を押えた。(湿原-加賀乙彦)

- (4) 大塚氏によると、ケガをしてからの清原はかなりショックを受けている様子だったという。「取りあえず安静にはしているよ。(せっかく好調だったのにケガをして)かなわんなあ」と話していたという。「メジャー」決断できない松井 一方、松井は今年も、坦々と数字を積み上げていく。(週刊現代-実著者不明 2002/5)
- (5) やめた方がいいよ、あんた、こんな新ちゃんみたい人とデートなんて。さあ、おばさんと帰ろう、帰ろう。おい、邪魔するなよ。折角、いいムードなのに。なあ、おい。だが、しかし、ないのだ。ないのだ。ついにないのだ。哲学クーン。ないのよーお。(ノンちゃんの冒険-柴田翔)
- (6) そこにあるのはダートラだけっ！始まりはいつも雨…じゃなくて嵐だった！土曜日の朝会場に到着。夜のTTに備えて会場で準備していると…突然のサンダーストーム！せっかくライダーたちも準備し始めたところだったのに…。ダートトラックのネックは雨なのだ。(モーターサイクリスト-鈴木大五郎 2001/10)

ただ、セツカク文1の場合、(1)のような意志動詞が先行する用例は数少なく、ほぼ(7)のような無意志動詞である。「余裕がある」「忘れていた」のような無意志動詞は、動作や行為ではなく状態を表しており、その本質は形容詞述語につながっていく用法であると考えられる。

- (7) 睡眠時間をけずってまで、起きているからには、それなりの理由がなければならぬ。せっかく朝寝をたのしむ余裕があるのに、むりしてまで起きている必要が、ほんとうにあるのかどうか。しかし、ほんとうにやる気があるならば、かなりのところまで短縮できるはずである。(睡眠の不思議-井上昌次郎)

「せっかく」を先行させて評価するためには、事柄が実現済みあるいは実現確定(予定)である必要がある。これは、確定条件もしくは予定条件を表す「のに」の構文上の意味と一致している。また、「せっかく」には、従属節によって描き出される事柄を「価値ありと認める」話者の心的態度も絡んでいる。これは、予想外や不本意などの感情を交えた「あてはずれ」や「食い違い」を表現している「のに」と一致していると思われる。一方、〈評価〉もまたほとんどの場合、〈実現・確定〉した事柄に対して行われるものである。事実でない事柄に対しては評価のしようがないのだ。しかし、評価にはプラス評価とマイナス評価とがある。「のに」は、逆接の確定条件表現であるがために、「のに」と共起する「せっかく」の構文も話者の期待外れというマイナス評価を表している。これは、「せっかく」の実例が持つ逆接条件の共起形式の中でもとりわけ「のに」に集中している主な原因に思われる。

上述したように、確定条件を要する「せっかく」と「のに」の構文上のこのような特徴は、モダリティの面においても共通するものがあると考えられる。「のに」の場合、主文末

のモダリティに制限があり、命令・依頼・意志・希望・推量とは共起できない。基本的に「のに」は、事実的な叙述文を求めているのだ。これは「せっかく」の用例からも見ることができると言える。

2.2 順接条件関係

順接条件関係は、逆接と同様にその共起形式が様々である。「のだから」のほかにも「ものだから」や「なら」、「から」などの接続形式が見られる。

2.2.1 「のだから」と共起する順接条件関係

「のだから」や「ものだから」と共起する「せっかく」の用例は、順接条件関係全89例のうち71例あり、順接条件関係全体の79.8%を占めている。(表4を参照)

本節では、主として「のだから」(ここでは「んだから」、「んやから」、「のですから」、「んですから」の形式も含めた代表形式とする)を「から」と比較しつつ取りあげる。「のだから」は、助詞「の」に助動詞「だ」がついて「のだ」になり、そこに原因・理由を表す助詞「から」が付いてできたものであると考えられている。

のだから = の (助詞) + だ (助動詞) + から (助詞)

松村(1969)は、「の」は、下に「だ」をつけ「のだ」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いると記述している。また、「のだ」は、理由や根拠を強調した断定を表すと記述している。「から」については、「原因・理由を表す。多く、話し手が主体的な立場でそれを原因・理由として取り上げ、それから導かれる当然の帰結と結びつけて述べる場合に用いる」としている。さらに、主文末のモダリティについて、「後件が話し手の意志や推量を表したり、聞き手に対して何等かの行為を要求したり(命令・禁止・勧誘・依頼など)する事柄である場合に多く用いられる」と、その性質を規定している。

「せっかく」を用いる文も、主文末のモダリティにおいて、命令、依頼、勧誘、意志など話し手の積極的な態度を表している。下記の(8)は勧誘、(9)は禁止を表す用例である。

(8) これではすいぶん窮屈です。それだと違反である、なんてことはありませんけれども、せっかく四百字詰というひろびろした原稿用紙を使っているのですから、せめて最初の四行か五行はゆったり空けておいたらどうですか。(エッセーの書き方 - 高田宏)

(9) まずはあなたから惜しみなく愛情を注いで、ふたりの絆を深めてください。せっかく素敵な恋人ができたのだから、意味のないことにこだわりすぎて相手を傷つけちゃダメよ。いい!? 女って、欲望の対象となることに喜びを感じる動物なのよ。

(週刊プレイボーイ - 南敬子/杉本彩 2004/8)

なお、「せっかく」には「のだから」ではなく、ただの「から」と共起する用例が4例

しかないことが分かった。下記はそのうちの2例である。

(10) 女性 私が死のうとしているのを知って、亡くなった私の親が、せっかく美しい桜が咲いているからと、私に見せてくれたのかもしれない。きっと娘に幸せになってもらいたかったのだろうと…その時に、何か不思議な感動を覚えたのです。

(女性自身 - 瀬戸内 寂聴 2004/6)

(11) 「わしもそうだと思うが、しかしばあさんの言葉だけを持ち帰るというわけにもいかない。せっかくここまで来たからには、自分のこの目で、たしかめられるだけたしかめていかないと、使いに来た甲斐がないというもの。それについては、どうしてもばあさんの力を借りねばならない。これはまあ、ほんの少しだが…」

(石中先生行状記 - 石坂洋次郎)

では、「せっかく」の順接条件関係における共起形式が「のだから」に偏る原因はどこにあるのだろうか。

野田 (1995) は、「のだから」の文の主文末におけるモダリティ制限は、「判断の根拠を表す『から』に共通した性質であり、『のだから』の特異性ではない」と指摘している。「のだから」の特異性は、「『のだ』の持つムードと『から』の従属度が高い性質が重なることによって生じた」ものであると指摘している。さらに、「のだから」の文の話し手は、相手(ときには話し手自身)が前件の事態を知っているはずだが後件の判断に至るほど「十分には認識していない」とみなし、十分認識させるために「前件の事態を改めて示し」ている。前件の事態を十分認識させた(認識した)うえで、それを根拠とした判断を後件で述べるところから、「後件の判断が必然的なものである」ことが示される。「のだから」の文にしばしば見られる「非難のニュアンス」は上記の性質に関連している。

一方、「せっかく」はすでに記述したとおり〈実現・確定〉した事柄に限定し、評価を下す副詞である。これは、「のだから」の「前件の事態を知っているはずだが後件の判断に至るほど十分には認識していないとみなし、十分認識させるために前件の事態を改めて示している」特性と一致している。「のだから」にも「のに」の場合と同じく、終助詞的用法が存在するのである。「のだから」の終助詞的用法は、「相手に事態を十分認識させる用法」と、「話し手が事態を改めて認識する用法」とに分類される。これは、「せっかく」と共起する場合にも当てはまる。次の(12)の例では、「苦勞して元氣になったことを相手に十分認識させ自重」するように促す文脈である。

(12) 「ありがたいけれど、きょうはもう、一度外へ出たんでしょう。やっぱり寒い間は自重してくださいよ。せっかくここまで元氣になったんですからねえ」いわれてふじ子は、やっと素直にうなずいた。いつものふじ子に似合わないことであった。どんなことでもふじ子は、すぐに素直に信夫の言葉を聞いた。(塩狩峠 - 三浦綾子)

また、下記のような無意志動詞 (13)、存在動詞 (14)、形容詞もしくは形容詞に準ずる形式 (15) が述語になる場合は、意志性が弱まり、「得がたい・貴重な」という〈評価性〉

が前面に出てくると考えられる。

- (13) 太郎は東京へ帰ってからも、軽井沢のことはあまり言わなかった。せっかく「上流階級」に招かれたのだから、どんなにいいもてなしをして貰ったか、言おうとしても、軽井沢で一番強い衝撃を受けたのは地主さんのことなので、それを言わないでおこうとすると、つい口が重くなるのだった。(太郎物語高校-曾野綾子)
- (14) 「せっかく、こうやって家にいるのですから、せめて、連れ戻すのを数日のばしてもらえませんか」(冬の旅-立原正秋)
- (15) 「貴女は折角英語の読み書きができるのですから、本格的に英会話でも習ってはいかががです。英語さえ出来れば外国へも行けます。新しい知識もどんどん取り入れられます。この田舎で埋もれてしまうのには貴女は惜しい」(花埋み-渡辺淳一)

このような事象は、名詞述語文(16)の場合も同様である。この場合、述語がすでに名詞であるがために、述語を名詞化する「の」や「な」などは不要になる。

- (16) もう今から食べ物をひかえても何もありません。せっかく出された御馳走ですから、私は鶏の丸焼きをみな食べました。でも何だか口の中に唾がなくなったようで、あんまりおいしくはありませんでした。(ビルマの豎琴-竹山道雄)

次に、「せっかく」と共起する「のだから」の文(以下セツカク文2とする)と、「せっかく」と共起しない「のだから」の文(以下ノダカラ文とする)とを比較してみよう。みとめ方において、ノダカラ文の「ない」を先行させる用例は容易に見られる。しかし、セツカク文2は(17)の「行かなきゃならない」という分析的形式の他に、「ない」を先行させる用例は1例もなかった。これは、セツカク文2の従属節は「話し手が価値ありと認めることがら」であることに関係しているのではなからうか。話し手が好ましくないと受け止めている事態の場合、「せっかく」を先行させるのはもっとも困難であろう。

- (17) 「せっかく、もらった家を出て行かなきゃならないいだから、私は、不運を歎いてもいいのに、昨日ね、私はとってもおかしな、楽しい気分になって来たの。これから、何が起るか分らないぞ、ってというような感じね。もちろん、不安もあるのよ。だけど、今までの生活が壊れたからこそ、これから、何か起るかも知れないのよね」(太郎物語大学-曾野綾子)

前接する品詞においても、ノダカラ文は動詞、形容詞、名詞、形式名詞、助詞と自由に結びつくことができる。一方、セツカク文2の場合は、上述のとおり実質形容詞の働きをする動詞述語文や形容詞述語文、名詞述語文に限る。

このように、「せっかく」は、主文末のモダリティに影響を与えるばかりか、従属節の述語に後続する接続形式をも限定しているのである。「の」をつけて名詞化したり、「のだ」をつけて断定したりすることが「せっかく」の構文においては必要不可欠であろう。

3 連体修飾関係

「せっかく」の副詞用法のうち、連体修飾関係の用例は176例あり、これは全副詞用法の36.3%を占めている。これは〈せっかく～動詞(句)述語[体言]助詞(に準ずる形式)～動詞(句)〉のように図式化することができる。本稿は、1.2節で記述したとおり、連体修飾関係を〈準逆接条件関係〉〈準順接条件関係〉〈逆接・順接両義の条件関係〉の三つに分類している。本章では、連体修飾関係のすべての接続形式を取りあげることは省くものの、対象を表すヲ格・ニ格、主体を表すガ格、取り立て助詞モ、主題を表すハを取る名詞と動詞との組み合わせに焦点を当て考察することにする。下記の表5は、連体修飾関係における助詞の分布である。

表5：連体修飾関係における助詞の分布

助詞 接続関係	を	が	に	に対して	へ	も	は	でさえ	まで	から	と	で	の	助詞ゼロ	合計
準逆接	53	26	16	2	3	20	13	1	1	3	2	1	-	7	148
準順接	5	3	1	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	3	15
逆・順両義	10	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	13
合計	68	29	17	2	3	21	16	1	1	3	2	2	1	10	176

3.1 「ヲ」格の名詞との組み合わせ

ヲ格の名詞と動詞との組み合わせの用例は68例ある。これは連体修飾関係の38.4%と全体の4割弱を占めている。

(18) 仕事では、外国はおろか、国内でさえ動きたくない。しかし、カネはあるから、セックス観光のためには外国旅行する—というのでは、あまりに退嬰的だろう。せっかく親父が粒々辛苦して貯めたカネを、道楽息子がいとも簡単に使いはたすのが、しばしば世のならいである。(「ゆとり」とは何か-飯田経夫)

(19) 水にすむ生物ばかりが網にかかった。付近の地下鉄工事でくみ上げた地下水が約三年間、堀川を潤していたが、昨年秋には地盤沈下の恐れもあり、くみ上げをストップ。せっかくよみがえった水環境を守ろうと、水源のない堀川に庄内川から導水したが、オグラノフサモは同研究会が調査するたびに減少していたという。(中日新聞 2002/2/7)

上記の(18)は準逆接条件関係、(19)は準順接条件関係の用例である。これらの用例はヲ格の名詞を中心軸として、先行する動詞と後続する動詞との間に準逆接条件関係あるいは準順接条件関係の意味関係をなしていることが分かる。このように、文頭に「せっかく」を冠することによって、元来ただの格助詞であったヲ格が逆接の意味を担っていると考えられる。

3.2 「ガ」格の名詞との組み合わせ

ガ格の名詞と組み合わせる動詞の用例は29例あり、これは全連体修飾関係の16.4%を占めている。これらの用例には具体名詞、抽象名詞、形式名詞などがある。そして、ごく稀ではあるが先行する動詞が省略された用例や、助詞は省略されているが後続する動詞によってガ格の名詞と動詞の組み合わせの用例であることが判断できる用例も見ることができた。

下記の(20)は形式名詞を用いた準逆接条件関係の用例、(21)は抽象名詞を用いた準順接条件関係の用例である。

- (20) 「…世界的に有名なビヤ・ドリンキング・カウの写真をとりたいとおっしゃいますんで一頭、だしたんですが、冬のまっさいちゅうにあっちこっちひっぱりまわして、歩かせたもんですから、それであなた、せっかく太らしてあったのが、いっぺんに目方が減ってしまいました。ワヤですわ。牛の肉ちゅうもんは、とどのつまり、赤身と脂身の配分ぐあいですからね。…」(新しい天体 - 開高健)
- (21) 残念ながら、わたしたちの研究はまだ、期待にこたえられるほど、成長していない。なんだ、その程度か、と失望することなく、せっかく育ちかけた研究の芽が、大きくのびるよう、ながい目でご支援いただきたい、とこの場を借りてお願いしておきたい。(睡眠の不思議 - 井上昌次郎)

3.3 「ニ」格の名詞との組み合わせ

表5のとおり、ニ格の名詞と組み合わせる動詞の用例は17例ある。そのうち、16例が逆接条件関係を表していると読み取れる用例である。また、「に対して」2例、「へ」3例もニ格と見なすことができるだろう。これらを含めるとニ格(と見なせる)用例22例中、21例が逆接条件関係を呈しているのだ。下記の(22)は準逆接条件関係、(23)は準順接条件関係の用例である。

- (22) 野蛮人たちはせっかく私がひく曲に耳もかたむけません。いくら人の心をうごかすようなたのしいまたかなしい曲をひいても、うけつけません。それどころか、豎琴に合わせてますます調子よく刀や槍をうごかして、ただ夢中になって、ナットを祈って踊っています。(ビルマの豎琴 - 竹山道雄)
- (23) むろんそのような予言にわたしは半信半疑でしたが、妻のことばを信じてやらなければ、彼女がまたどこかへ行ってしまいそうな気がしたためもあり、そうすることがせっかく戻ってきてくれた妻の愛に報いることであるとも考えて、気力をふるい起して絵筆を握ったのです。(エディプスの恋人 - 筒井康隆)

このように、元来逆接の意味を持ち合わせているヲ格、ガ格とは性質を異にするニ格(本来逆接の意味は備わっていない)も、「せっかく」と共起することにより、逆接の意味合いを強めると考えられるのではなかろうか。

3.4 取り立て助詞との組み合わせ

モによって取り立てられる「せっかく」の用例は21例ある。これは全連体修飾関係の11.9%を占めている。そのうち、20例が準逆接条件関係の用例である。

- (24) 大銀杏の根元だけが炭化して異形の姿をさらし、その附近にあった防空壕の内部にも火がはいて、せっかく周二が投げこんでおいたラジオも内部の金属の機械だけを残して焼けてしまっていた。(榆家の人びと - 北杜夫)

モによって取り立てられる名詞の用例はすべて逆接関係にある。ヲ格の名詞と動詞との組み合わせの場合と同様に、「せっかく」が文頭に先行することによって取り立て助詞モに逆接の意味が付与されるのである。

ハを取る名詞と動詞の組み合わせの用例は16例ある。これは全連体修飾関係の9.0%を占めている。用例数からすると、二格の名詞と動詞の組み合わせの用例より下回っているが、主題を表しているということに重点を置きここで取りあげることとする。(25)は準逆接条件関係、(26)は準順接関係の用例である。

- (25) 新聞によると、近くりオの音楽祭に出演するという。せっかく歌ってもらった私の処女CMは、もう月日の流れに消えうせてしまっているが、私の脳裏に今もチカチカと光っているスカートの記憶は残っている。(風に吹かれて - 五木寛之)

- (26) 「…そしたら、…保険があるから一文もいらんというたんじゃ、そしたら、折角集めたお国の金は、若えもんにつかわさにやいけん。わしらはもうええんじゃいうてきかん」霧子は、思わず、「そりゃおかしいわ」とおたいばあさんの考え方にいらいらしたものを覚えて言いかけたのだが、途中でそれが胸につかえてとまってしまった。(さきに愛ありて - 藤原審爾)

以上の記述をまとめると、連体修飾関係においてどの助詞との組み合わせにせよ、「せっかく」を用いる文は、逆接の意味合いを色濃く表していることが分かる。また、名詞に先行する動詞を考察してみると、意志動詞と無意志動詞のどちらも用いられていることが分かる。ただし、無意志動詞は状態性を表しており、実質的には形容詞と同じ働きをしていると見なすべきだろう。なお、意志動詞は、具体的な動作を表すという動作性は擦り減り、出来事の結果の側面という状態を表す働きをしていると考えられる。その際、「せっかく」の表す意味も「苦労して、骨折って」という意志性が弱まり、次第に「得がたい、ありがたい」という評価性が前面に出てくると思われる。それにもかかわらず、「せっかく」が先行する従属節において形容詞述語や名詞述語が極めて少ないのは、「苦心して、骨を折って、つとめて」のような、「せっかく」の持つ本来の意味が拭いきれないことに起因するのだろう。

4 主文の述語にかかる「せっかく」

前掲の表3から分かるように、「せっかく」の用例のうち、主文の述語にかかる用例30例を採集することができた。これは、副詞用法全485例の6.2%しか占めていないが、無

視できない数である。

表6：主文の述語にかかる「せっかく」の分布

文末形式 接続関係	のだ	ところだ とこだ	だ	その他 ⁸	合計
準逆接	4	1	—	1	6
準順接	18	2	3	—	23
逆・順両義	1	—	—	—	1
合計	23	3	3	—	30

ここに至るまでの記述で明らかになってきたが、「せっかく」は逆接条件関係の用例が常に順接条件関係を上回っている。しかし、本節で述べる主文の述語にかかる場合のみ、逆接と順接が逆転する結果となった。順接条件関係であると判断できる用例は23例あり、これはこの用法の76.6%をも占めている。また、主文末の形式が「のだ」と共起する用例も23例と7割強である。下記は、逆接の「ところだ」(27)、順接の「のだ」(28)と「だ」(29)の用例である。

(27) 「人手不足なんだ。一人でも欲しい。勇吉だってそうだ。今やめられちゃ困る。せっかく整備の基礎を覚えさせたとこだ。これから役にたつ矢先だ。虎吉さんが何と言おうと、おれはやめさせねえ」羅臼のホテルへ電話を掛けたが、布川たちはまだ到着していなかった。(湿原-加賀乙彦)

(28) 高男が訪ねて来た用件の方は諦めて立ち上がると、勢谷も席を立ったが、その時彼は横の自分の机の上に乗せている名刺に気づいた風で、それを取り上げると、「折角、来たんだ。ここへでも行ってみるか。確かかどうか知らんが、そう不正確でもないだろう。一金は持ってるらしい」と言った。(射程-井上靖)

(29) 「持ち帰りしやすい装花というと短く詰めてマスに挿したものが多くなります。今回は、長いままで持ち帰れて、飾ったときにも高さのでるアレンジに挑戦してみました。せっかく選んだバラですもの、持ち帰るかたにも喜んでいただきたいですね」(花時間-田渕佳英 2004/6)

「せっかく」は、従属節の述語にかかる場合は「のに」と「のだから」に集中し、主文の述語にかかる場合は「のだ」に集中する性質を顕著に呈している。要するに、「せっかく」の本質は「の」と密接に関っていると見えよう。

5 逆接と順接との相関

「せっかく」の意味と機能の分析において、〈逆接〉と〈順接〉という概念が重要なキーワードになっている。前掲の表3からも分かるように、逆接・準逆接条件関係の用例数が圧倒的に多く全体の69.3%と7割近く、順接・準順接条件関係の用例数は27.2%と全体

の3割弱を占めている。「せっかく」が全用法にわたって用例数が逆接条件関係に集中しているのはなぜだろう。これは、副詞用法において「せっかく」と共起形式を持つ用例が「のに」と「のだから」に集中していることと不可分の関係にある。

前田(1995)によると、ノニ文が、前件と後件の「食い違い」関係を表す典型的な逆原因である場合、意味的に対立するはずの「原因・理由文に置き換えられる場合がある」と指摘している。例えば、次のような禁止文である。

- a まだ病気が治らないのに、無理をするな。
- b まだ病気が治らないのだから、無理をするな。

(前田：1995 p.114)

原因・理由文に置き換えられるノニ文に共通するのは、「主節が否定表現(あるいは評価的に否定的な意味を含む表現)になっている」ことである。そして、「否定のスコop」に前件が入っていれば「のに」が用いられ、入っていなければ「原因・理由を表す接続辞」が用いられる。

- a [まだ病気が治らないのに、無理をする] な。
- b まだ病気が治らないのだから、[無理をする] な。

(前田：1995 p.115)

このように、「のに」が〈禁止〉や〈否定〉と関わるのは、「話者による食い違いの認識を表す」ということと関係している。本来、結び付くものではないと予想されている前件と後件が、「それにもかかわらず結び付いているという場合」に用いられるものであり、文自体がそれだけで「ありえない・不可能だ・無理だ・変だ」という「話者の違和感・否定の評価を表す」。つまり、前田(1995)は、ノニ文は「マイナス評価の文脈に入るべき文」であるという見解を示している。

また、野田(1995)によると、「のだから」の文の話し手は相手(ときには話し手自身)が前件の事態を知っているはずだが後件の判断に至るほど十分には認識していないと見なし、十分認識させるために前件の事態を改めて示している。前件の事態を十分認識させた(認識した)うえで、それを根拠とした判断を後件で述べるところから、後件の判断が必然的なものであることが示される。「のだから」の文にしばしば見られる非難のニュアンスは上記の性質に関係している。

評価には、マイナス評価とプラス評価があり、逆接条件関係の場合はマイナス評価、順接条件関係の場合はプラス評価を表すのが一般的であると思われる。しかし、「のだから」の場合、順接条件関係であるにもかかわらず「非難のニュアンス」が見られる。つまり、構文環境上は順接条件関係にあるが、その意味を分析すると「事態を知っているはずだが十分には認識していない」相手あるいは話し手に「十分認識させる(認識する)」事態を表している。そのため、表面上はプラス評価のように見えても実際上はマイナス評価として見なされるのである。

これは、「せっかく」の用例が逆接条件関係に偏る現象に対する一つの原因究明になる

はずである。また1.1で述べたように、辞書記述において順接条件関係の言及がなかったのもこれに起因すると言えよう。

6 「せっかく」の多義性

「せっかく」の多義性にいち早く着目したのは、河原崎(1976)である。河原崎は、「せっかく」はその共起形式の相違によって意味が変化していると指摘している。また、接続形式において、逆接なのか順接なのかによって意味変化が起きていると主張した。ただ、「せっかく」の多義性に影響を与える歴史的要因についての言及はなされていなかった。

「せっかく」の多義性が文型に表れる点は、本稿でも検証済みである。本稿は、文型に限らず、従属節の述語の語彙・文法的な意味も重要な要素の一つと見なす。「せっかく」は、「わざわざ」の特徴である〈意志性〉という意味の他に、〈評価性〉をも表している副詞である。〈意志性〉に従属節の述語が動詞文であることが関係しているとすれば、〈評価性〉には事物の状態を表す形容詞文、名詞文が関係していると考えられる。ただ、前掲の「せっかく」の実例の考察からも分かるように、従属節の述語が形容詞文や名詞文になる用例はごく少数である。

しかし、従属節の述語が意志動詞の場合、「せっかく」は〈評価性〉より「苦心・苦労の末」という〈意志性〉が際立つと思われる。すなわち、「骨を折る」という元の意味がまだ多分に残っている用法である。が、無意志動詞や形容詞、名詞が述語になるにつれ「ありがたい・得がたい・貴重な」という〈評価性〉が前面に出てくるようになる。

なお、紙幅の関係上、詳細に記述することが叶わなかったが、「せっかく」の従属節における動詞の中には「あげる」、「くれる」、「もらう」といった授受表現と組み合わせさせて使われる用例数が圧倒的に多かった。一方、主文では、完了や遺憾の意味を表す「しまう」と共起する用例が目立っていた。このような動詞の組み合わせとの共起形式は、「せっかく」の多義性における「ありがたい」や「価値あるものが実現できず無駄になった」、「残念だ」のような、評価性が際立つ論理的な支えの一つになり得るのではないだろうか。

7 まとめと今後の課題

本稿は、「せっかく」の副詞用法の共起形式が、逆接条件関係において「のに」、順接条件関係において「のだから」に集中している原因について論じてきた。また、全用法にわたって逆接の意味関係を表す用例数が順接に比べて圧倒的に多いことから、「せっかく」の「単文用法→逆接用法→順接用法」の派生プロセスの実証考察ができた。

本稿は、「せっかく」を「評価性と意志性を併せ持つ叙法副詞」とであると位置づける。ただし、評価の種類において典型的な評価副詞である「あいにく」や「さいわい」が表すような〈一般評価〉ではなく、どちらかといえば「意外にも」に似た〈個人評価〉に近い中間領域の評価であると見なす。また、「せっかく」は、共起する従属節がほぼ動詞述語文であることから、述語の品詞を制限する働きがあると言えよう。「せっかく」が付加さ

れることにより、これらの動詞は、状態を表す無意志動詞に限らず、本来動作・行為を表す意志動詞の場合でもその意志性が希薄になり、結果の側面が強調され評価性が前面に出てくるようになると考えられる。ただし、従属節の述語に圧倒的に動詞が多いのは、「せっかく」の持っている本来の〈意志性〉の意味が払拭し切れていないのが一因ではなかろうか。加えて、「せっかく」は従属節の接続形式ばかりではなく、主文末のモダリティをも制限する機能を持っている点からも〈叙法副詞〉に位置づけるべきであろう。

渡辺(1980)は、前掲の7つのモデルにおいて「②→④→⑥→⑦」の順に、「次第にパートナーを併呑して行く様を見ることが出来る」(『国語意味論』p.329)と述べている。しかし、本稿の3章で記述したとおり、「せっかく」には渡辺(1980)によってモデル化されていない事例が多く見られた。つまり、「せっかく母が作ってくれたご馳走をだめにした」のような、本稿で「連体修飾関係」に分類した用法である。管見を述べると、この用法は小矢野(1996・1997b: 連体的つきそい・あわせ文)の言及を除き、国語辞書においても記述がなされていない部分である。

筆者は、「せっかく～、主文」→「せっかくのN(名詞およびそれに準ずる形式)」へ一足飛びしたのではなく、その間には「せっかく～N(名詞およびそれに準ずる形式)」に代表される段階があると見なす。さらに、渡辺(1980)の⑦「せっかくだったね」のような用法は、本稿のデータベースにおける考察の限りではあるが、事例が見当たらなかったため再考の余地があると考えられる。

今後は、稿を改め、「せっかく」の吸収・圧縮の過程が「②→連体修飾関係→④→⑥」の順を辿ると見据え、渡辺モデルの修正を試みる。

注

- 1 『デジタル大辞泉』と『明鏡国語辞典』の2冊のみ、逆接と順接の両方を記述している。
- 2 本稿は、本文の記述において「せっかく」「折角」「セツカク」を「せっかく」に統一する。
- 3 文末の「言語資料一覧」を参照。
- 4 古体と見なして研究対象から除いた用例7例のうち、下記の2例が昭和戦後の用例である。
 - (1) 海軍として何はともあれ航空の躍進こそ急務中の急務なり折角御自重御努力のほど願上居候(山本五十六-阿川弘之)
 - (2) 「いつぞや、娘御が秋には嫁入するとかいってられたが、折角育てて花ならば、ぱっと咲き、先ず一人前おいうところで、ぼいと他人様い持って行かれる。どう考えてもまじやくにあわないねえ」(おとこ鷹-子母沢寛)
- 5 連体修飾関係における〈準逆接・順接両義の条件関係〉の用例4例中の2例である。
 - (1) 支店長は、荷車の前部へのった。「のれましたか、折角ここまで来て、落ちたらあきまへんで!」ともかく乗りもの、動いてゆけるものを捕えて、機嫌のよくなった人達がみんな笑った。(播州平野-宮本百合子)
 - (2) 駅に引返せば、終電車なら間に合ふことが出来る。しかし、折角病院に来てみて、引返す気はしない。殊にその日は、或る友人から芋を沢山貰ったので、いつもより余計に持って、意気込んで来てみた。(聖ヨハネ病院にて-上林暁)
- 6 連体修飾関係における〈準逆接・順接両義の条件関係〉の用例13例中助詞の異なる4例である。

- (1) この事はよく了解していただきたい。日教組は赤旗を振ったとかストをやったとか、世間の非難をあげたことも少なくないですが、願うところはただ一つ、せっかく築いてきた民主教育をぶちこわされたくないという、それだけじゃないですか… (人間の壁 - 石川達三)
- (2) 今まではまだ何だか望みがありそうに思っていた者も、みなもうこれですっかり思いきりました。せっかくあの言葉をおぼえた鬨哥も、できたらこれを、お婆さんにたのんであのビルマ僧の肩にのせてもらおうと思っていたのですが、それもやめました。(ビルマの堅琴 - 竹山道雄)
- (3) 「…越前からは北国街道をつたって討ち入ってくるし、尾張からは木曾川を渡って乱入する、美濃は美濃で揖斐城主の揖斐五郎さまがこれらと呼応して軍勢を出す、いやもう、えらいさわぎになるぞ。せっかく美濃の国主になられた斎藤山城守さまは、これをどうなさるか」事実であった。(国盗り物語・斎藤道三 - 司馬遼太郎)
- (4) こちらは今夜はじめての附合のことで、ずいぶんせっかちのほうだから、たかが売女の肉体、たんねんに時機を待っているわけにゆかず、たぶんこのへんでよかろうと、手さぐりにさぐりあてたのは乳房のあたり、ふわふわとした部分で、ちょっと頼りないが、せっかくつかんだ手中の白玉の、露に散らすのも惜しく、これは聖心の信仰のほうに一時預けにしておくほかない。(かよ小町 - 石川淳)
- 7 「からと」の「と」は、引用の「と」である。
- 8 「だ」を暫定的に間投助詞として見なし、「親切に」と「だ」の間の文面が省略された特殊例の「その他」に分類する。
尾上は鼻孔を膨らませ、お得意の脅し文句をつらねはじめようとした。「言ってほしけりゃ言ってもいいんだぜ。え。せっかくひとが親切にだ」その時、急に「彼」が欠伸をした。七瀬は驚いた。いくら夜遊び続きで疲れているからとはいえ、こんな時に欠伸ができる「彼」の神経に驚いたのだ。(エディプスの恋人 - 筒井康隆)

参考文献

- 石神照雄 (1982) 「様相副詞『セツカク』と構文構造」『信州大学教養部紀要』16、pp.1-13
- 林 禎映 (2016) 「副詞『せっかく』の史的変遷」『国語と国文学』93-8 東京大学国語国文学会、pp.53-68
- 河原崎幹夫 (1976) 「副詞の導入の具体的研究2 『せっかく』(付『わざわざ』)」『日本語学校論集』3 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、pp.79-90
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集3』秀英出版、pp.45-92
- 工藤 浩 (1989) 「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39、pp.13-33
- 工藤 浩 (1996) 「『どうしても』考」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房、pp.163-192
- 工藤 浩 (1997) 「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房、pp.55-72
- 工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店、pp.161-234
- 工藤 浩 (2005) 「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-8 東京大学国語国文学会、pp.1-15
- 言語学研究会・構文論グループ (1985) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (2)」『教育国語』82 むぎ書房、pp.25-67
- 言語学研究会・構文論グループ (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (4)」『教育国語』84 むぎ書房、pp.49-68
- 小矢野哲夫 (1996) 「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件—『幸い』と『せっかく』を例にして—」『日本語・日本文化研究』6 大阪外国語大学日本語講座、pp.1-16
- 小矢野哲夫 (1997a) 「規定語『せっかくの』の構文機能」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』

- 明治書院、pp.195-208
- 小矢野哲夫 (1997b) 「副詞『せっかく』の用法」『日本語・日本文化研究』7 大阪外国語大学日本語講座、pp.1-16
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法—』和泉書院〔(2002) 再刊を参照〕
- 名嶋義直 (2003) 「ノダカラの意味・機能—語用論的観点からの考察—」『語用論研究』5、pp.17-30
- 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』9月号 明治書院、pp.13-27
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代語文法 6 第11部複文』くろしお出版
- 野田春美 (1995) 『『のだから』の特異性』仁田義雄編『複文の研究』上 くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』日本語研究叢書9 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1987) 「副詞の語法と社会通念—『せっかく』と『さすがに』を例として」小泉保教授還暦記念論文集編集委員会編『言語学の視界』大学書林、pp.203-222
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 蓮沼昭子 (2012) 「事態の既定性と『せっかく』構文」『日本語日本文学』22 創価大学日本語日本文学会、pp.19-41
- 樋口文彦 (1989) 「評価的な文」言語学研究会編『ことばの科学 3』むぎ書房、pp.181-192
- 前田直子 (1993) 「逆接条件文『~ても』をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版、pp.149-167
- 前田直子 (1995) 「逆接を表す『~のに』の意味・用法」『東京大学留学センター紀要』5、pp.99-123
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 松村明他編 (1969) 『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 南不二男 (1990) 「文法面からみた日本語 (I) 文の問題をめぐって 日本語の複文」『国文学解釈と鑑賞』55-1 至文堂、pp.53-65
- 宮地 裕 (1983) 「二文の順接・逆接」『日本語学』12月号 明治書院
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方』角川書店
- 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』(復刻版1970) 宝文館
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- 渡辺 実 (1980) 「見越しの評価『せっかく』をめぐって—国語学から言語学へ—」『月刊言語』9-2〔再録：渡辺実 (2002) 『国語意味論』塙書房、pp.317-332〕
- 渡辺 実 (1997) 「難語「さすが」の共時態と通時態」『国文学科紀要』14〔再録：渡辺実 (2002) 『国語意味論』塙書房、pp.372-389〕
- 渡辺 実 (2001) 『さすが日本語!』筑摩書房
- 渡辺 実 (2002) 『国語意味論』塙書房

辞書・辞典類

- 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店
- 新村出編 (2008) 『広辞苑』第六版 岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2007) 『精選版 日本国語大辞典』第二版 小学館
〔初版：日本大辞典刊行会編 (1972-1976) 『日本国語大辞典』小学館〕
- 松村明編 (2006) 『大辞林』第三版 三省堂
- 松村明編 (2012) 『デジタル大辞泉』第二版 三省堂
〔2001年4月『大辞泉』初版を元に公開、初版：松村明編 (1995) 『大辞泉』三省堂〕

言語資料一覧

『CD-ROM版新潮文庫の100冊』(翻訳作品33冊を除いた、昭和戦後の45冊71作品)

『CD-ROM版新潮文庫の絶版100冊』(翻訳作品32冊を除いた、昭和戦後の39冊75作品)

『CD-ROM版CASTEL / J』(日本語教育支援システム研究会より「講談社新書」37作品)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)(国立国語研究所)(新聞・雑誌のみ)